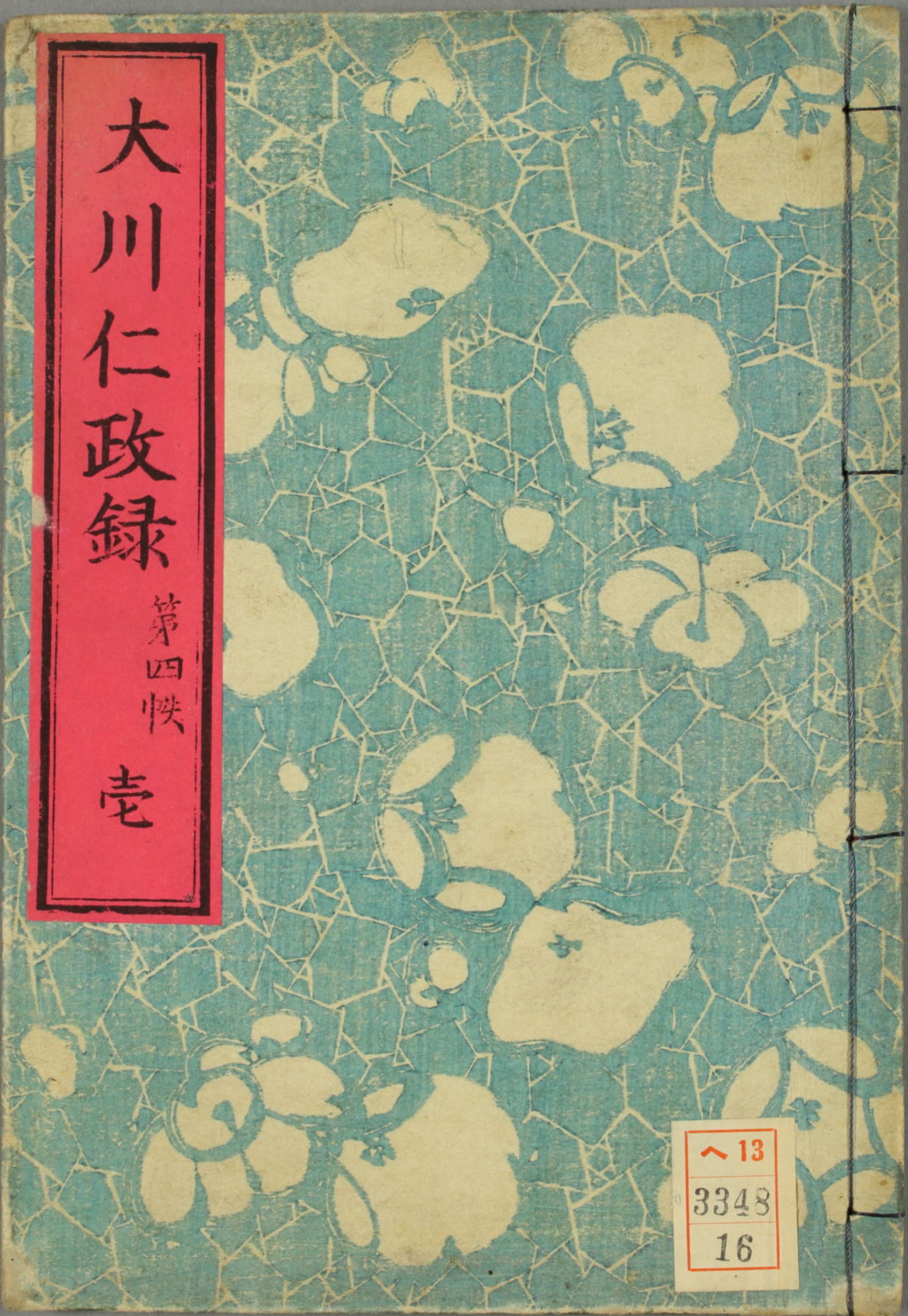




大川仁政録

第四帙

壺



~ 13
3348
16



瓜 おん
 笈 だい
 天 い
 帳 ち
 二 ん
 致 せい
 録 ろく

全部 五冊

松亭主人編次

歌川芳豊畫圖

序

夫不義而富貴則真如坐浮雲
 其傾覆可數指而待矣茲如榛
 兵庫田積隼人都築主水兄弟
 等精忠之士為奸惡無双之五
 十嵐平太夫五十嵐平馬等被

大正十八年八月廿九日
 本大學出版部贈

二一 女界四屏卷之一

二一

18
3348
16

困而蒙虛名如小鷹白糸貞操
之烈婦終沒於品川海矣於是
奸惡之暴行日募而災害頻到
於是千葉家之危急如踏薄冰
似臨深淵然為大川侯智畧奸
曲之徒竟不免天網所謂恢々

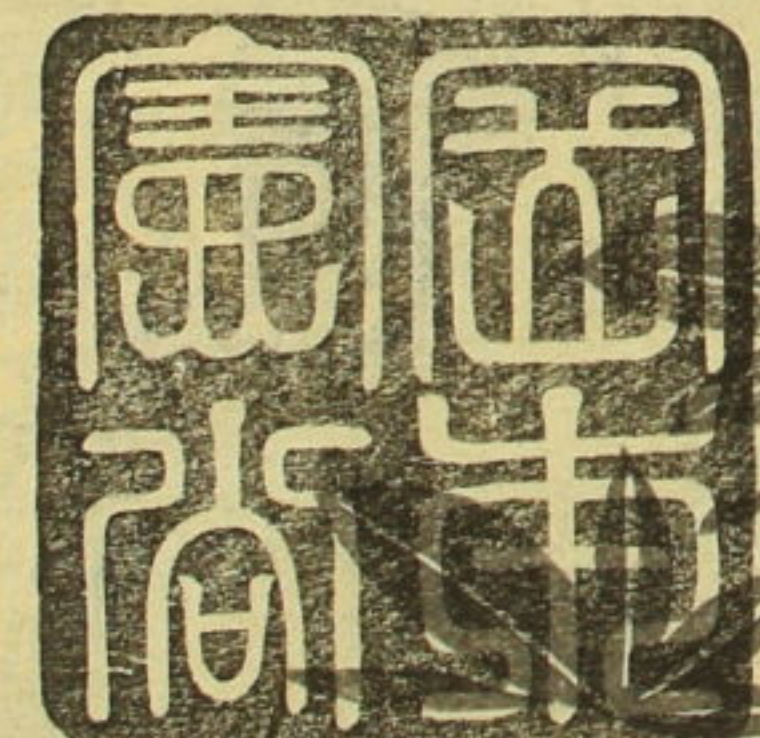
踈而不漏者也嗚呼可不慎哉



安爰丁巳中種



竹藪



大正二年録四輯卷一

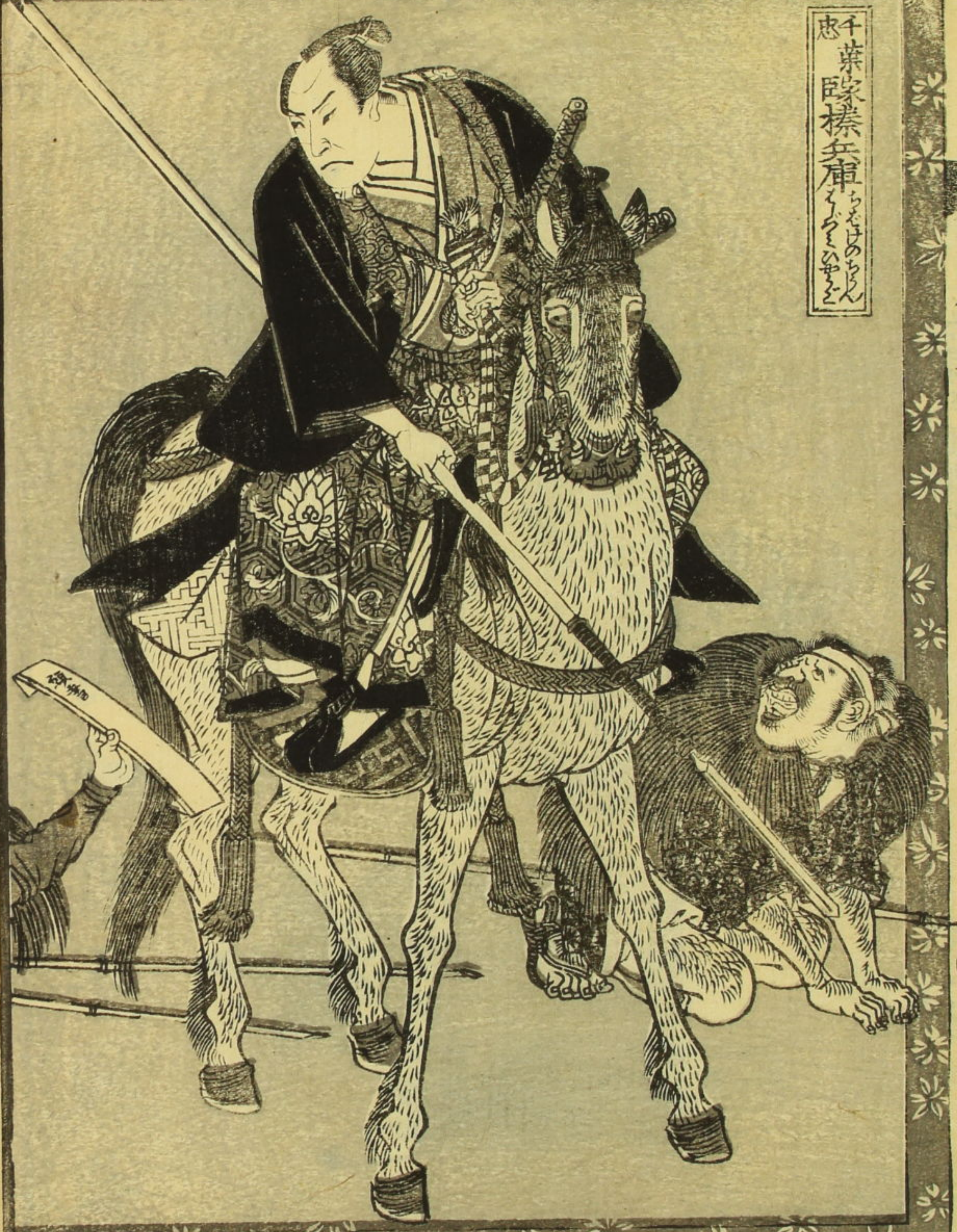
〇〇〇

千葉家臣五嵐平大夫



千葉領名

千葉家臣五嵐平大夫





上杉顯定 うさぎのあきら

扇ヶ谷定政 あふまのさだまさ



鹿毛手理金 しかげのてりかね

向藤三郎 むかふじのさぶろう

幸野万藏 さいのまんざう

大川仁政錄

第四輯惣目錄

卷之一

第一回 憚旧君窮士改名
三碗茶一將蕩心

第二回 感誠烈女動鍊心
扶情欲奸臣晦君

卷之二

第二回 書諾余人釀災害
欺計廢人塞忠諫

第四回 倭者友間苦清士
二婦之誠情俱死

卷之三

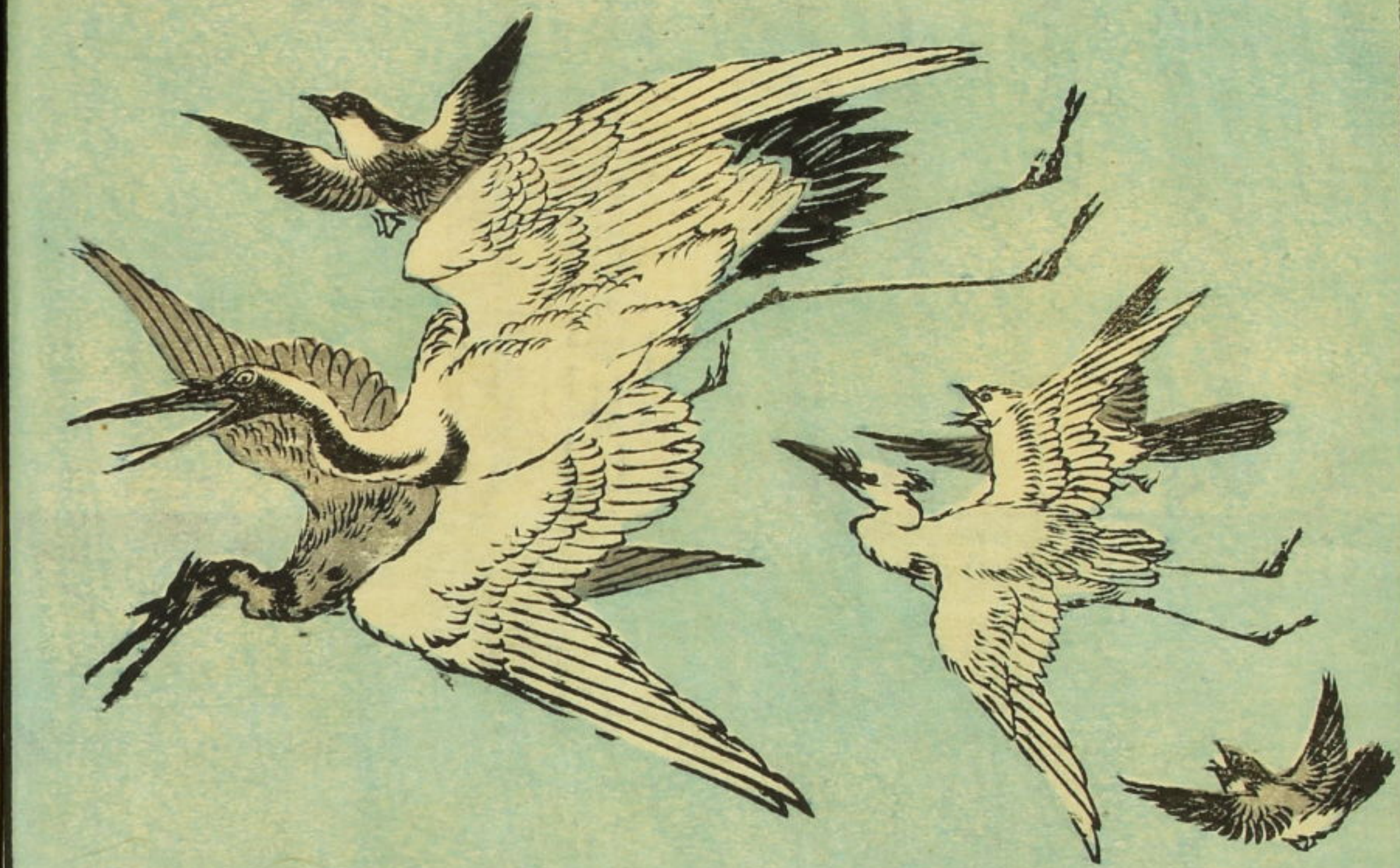
第五回 義漢遠來而告爰
兩夫膽勇浮海上

第六回 再活菩薩之加護
義與愛養美異諫

卷之四

第七回 相爭兄弟之至誠
為重罰令走奴僕





第八回

強城法騷乱郡郷
信片言為証善士

第九回

一書倭者之挫膽
老奸知破敗自殺

卷之五

第十回

囚人破牢獄跡
旅客卧房因密話

第十一回

不免天誅惡輩亡
善男女茲遂素懷

第十二回

貞婦殺身清耻辱
翁語前因解疑惑

通計十二回 大尾

大川仁斐録

第四輯惣目錄終

三川舎老人編 玉蘭齋貞秀画

繪本筑紫話

初編五巻
近刻

次篇引續發兌

松亭大人著 歌川国貞画

近世説大川美談

全五冊
發兌

編輯追々賣出

故山田案山子著 歌川芳梅画

繪本龍虎実傳

初編
近刻

千乘自亂
橋本屋自系



口馬佛像四丁半
浮世喜樂齋画

近世談大川仁政録第四輯卷之一

松亭主人編次

第一回

憚曰君が射士改名
三椀茶一將蕩心

大聖孔子の時合も顔回短命あり再伯牛の疾ゆき聖賢といふも幸不
幸あり況や常人不於とてや已ま罪ありといふも不幸ありとて困厄小る
しむ者ゆり栄辱小因く操と易らうとて本意なき免責小田積巨有
利を先年母の教小依く一先川越へありひき叔父都築左近が方不在
御朱印の盗賊と穿鑿するといふと手がらむ連も得るは情心小
思ふ中其夜の曲者を一朝夕の盗賊小ゆらば何国の者らと

大川仁政録第四輯卷之一

計らまねど鈴ヶ森への更と此所不居く穿鑿をて共便美と得
まどと其近辺不住居てよりく世の風説と聞合ふ便美と得る
も有べしと思案して叔父左近小思小程と物々々夫も尤も
色角もすなご中申さる此知彼知と尋求し小同国豊嶋郡辺り
知音ゆりく此方へ来玉へといふ故麻布といふ知不佳宅と求り銀術の
師範となす小此知を総及小程近々六田積豆と名乗る銀術の指
南とあるも旧主千葉家へ憚るさあもゆりごとく母方の苗字と依り
都築主水と変名しより是は大和物語小水とモドリといへ御朱印手
小入り再び帰参る人更と思ひ行末と祝し斯く改し叔父の更
と叔父左近が方よりも主水が方よりも母飛鳥の方迄申送りたるを

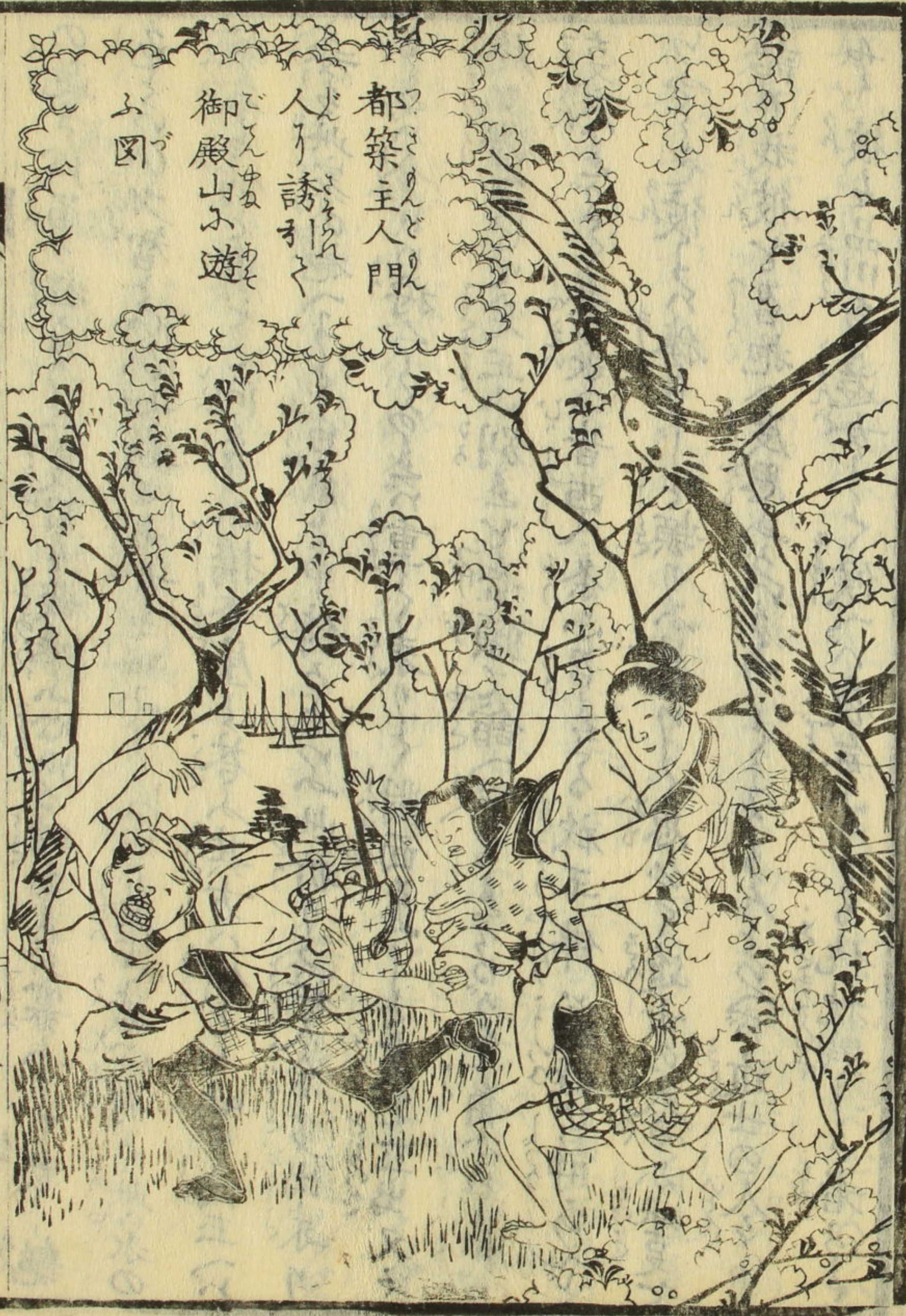
嫁小奮を是と聞今迄も川越へ行朝夕の給仕とをなさんと思ひ
叔父の知とをいひあぐ他の家へ我身迄行くと居人も心ある業あふ
ゆりかへし外不独居玉り定めり万の更不自由小了をゆり
幸ひ妻行くと朝夕の煮焚洗洒ホ心と付仕へ奉らん此更免を玉へと母小
とと飛鳥も嫁の切なる志小し此更隼人小しと隼人の中より
近も閉門御免をゆり共いす土仕と苗引籠り居る更あま何更も
遠慮がら小奮へ先頃豆出国以前より懐胎し此頃を早六月七月小
りや成めらん此家の内小おのり出産さんそより共連く行んとか
らば是も又人の妻より者の情あま夫と押く苗置る彼が心小物と
思ひ若身小障る更もゆり懐妊の身の大更たり爰小居く身と樂

小心と困んより懐妊の身ハ躰と動し心と安んじたりと却て心
悴が心を志し終るも連く行んとも免も角も計らひ玉へとも故
其更と主水方へも申送り小巻を送り遣し主水連も妻の貞節
父母の情又其身も浪々の身乃不自由ある母の指揮不後ひて小巻
と引取家内の更と打任せり故心安くして誓古の間より知々方々
歩行室詮美の便冥と求めり程多く小巻の臨月小及び男子と出
生ありりる産も至くと安らふ小母子より小日立り此更母の方迄
申遣しりる故隼人夫婦も大に歡び世が世々ゆめあり親族共も
呼集會悦びりるあそびり我連も遠慮の身へ亘り勿論勘気乃
身の上あるべ夫も又々難し連方の賄々隼人方より送り心計りの

祝とほ名ど小太郎とそ名付憂が中も主水夫婦が寵愛おさるる
小太郎が成長とそ樂々然る小門弟も追々出来り親子三人が
衣食の料も更欠てり不自由あり世と経共昔の身も似て
もゆり我過ちより父母の追難美と掛世と狭く過玉の更の口お
こ一日も早く室詮美仕出し帰参り度思へどもいまだ時至ら
ざるあや空しく先陰を送りりる復説総州千葉家小於て氏胤
老年小及び其上病氣故嫡子自胤小世と譲らるる欲も御朱
印紛失ゆり頂其更の延引不及とつづも錦倉小在りる自胤届因せ
しめ又小代りりる領目の政務を司りりる性りりる放鷹と好みけ
五十嵐又子是より取入り自胤の心小叶ひいつりる青運して平

太夫を老臣の次席小居て政良小拘らへ平馬の自胤小付らましく重く
用ひらまゝり去小隣国なる扇ヶ谷定正を自胤鎌倉小在折懇意
不出會し不當時武刃なる五十子の城不在ら互ひ折々向音信
し小ゆ時定正方より申来りたる此頃久々對面と逐々候明日某り
領分へけり狩し玉の途中不於出會俱々狩暮まぐとの夏あり
自胤えより好む知るまば早速小領兼し翌日未明より出馬し途中
不於面會あり互ひ小礼讓終りし後兩將とも年若の夏ありまむ
得物と争ひ芳りと狩せし小自胤余り小深く狩進んで供人をも
續々と咽錫さく堪らま極或家小入る茶を乞ふ是はま品川宿
ある橋本屋とくる宿屋まそそ有る折節誰も居合はば自胤とる

遊女一人居しり見り小供人も續うと一兩筆の人付添居のあれ
ども常人あべ思ひら自ら立と茶と汲来りし指出を自胤手
取ふ十分と有と至と温し一飲ふ吞畢て今一ツと乞まらるま
持来り小此度の七分目程も有て共く熱し自胤是とも飲て又乞
まらる今度の至極熱うとサけり汲来りしと自胤この時漸
心気治りて彼女と見るま年の頃をサ一二女と見へく艶色美麗き
手弱女あり自胤吃し終りて此茶を其方汲来りしや又誰ぞ汲わ
くたさしやと問う小自ら汲と黍りしりと答ふ自胤殆ど感心ゆま
天晴婦女も珍らしと奇也まら人の咽喉とけり知ら我始め強く
鍋しる時あま温くして沢山小あり二度目の共く熱うして口中



都築主人門
 人ヲ誘引ク
 御殿山小遊
 小図

六十二女録曰昇卷一

九



主水
 どん

六十二正金口車卷一

四

の乾きぬ苗う程より三度目と我味ふ心ゆる時あるは寡ふて熱艶
色々のひや智とのい如斯るお女を世ふけはと甚ど感心有と此家の
家名を何と申ぞと問まり小橋本屋と答ふ其方へ何と叫と向玉へ
妾を此家の抱へうと白糸と申侍うとふ此折う供人余多出来り
々々今日へ侍うとあるは重く来りて對面をへと爰と立出又々
終日狩くして定正小別と告願て館へ歸らまらるが兎角小自糸が
夏忘まらる壽永の昔西八条小召まらる祇王佛義経の静るんと
つとを彼らと勝らと頻り小暴りと思はく近士の人々小此夏を
語り我彼と召抱へ度思ふううとくうんとふ近士の人々申
かり彼ら品川ある遊女う候へば夜毎小うする枕賤しと者うも

身と任とのあるは御譲へ召ま夏い候と其上召抱へ玉うの
其橋本屋へ應對まり彼が身と贖ひ出されは候間若左中の
夏老臣達の耳へ入る御身の為悪うくくわといひるは自亂を
心惑ひ去るも彼が如き者の世小寡惜と者ありと兎角小自糸が
と忘まらるそ有う五十嵐又子此夏と聞心中小笑と含と氏亂の
老年小及び最早余命あり自亂を配る夏と計る安くと兼
て目とけ置る自亂が近侍の輩小私語て密小橋本屋へ同道とせ
忍びく小自糸が本へ通とせたり

第二回

感誠烈女動鉄心
扶情欲奸臣賤君

再説都築主水を叙法指南を愛ふ二年余りと過し多う或日門下中
伴い品川ある御殿山の櫻より成と見物小行々小何様老若男女
群集すく割篋小竹筒あんど木の本小打問酒汲り諺つ舞川
すもゆまへ又を哥よみりて懐紙小何中書散りて花の枝り
付る之有りて己が随意遊び戯る有様主水も奥小入此れ彼れ見
歩行小日も中西小傾さるまへ此れを去り或酒樓小入る一盃と吻
し居るまへ春の夜の短く早初夜頃も成り主水のやう存の外小
間取り最早帰んとつる皆々酒氣と帯り夏あまの先生左の急
ぎ取小更りの今宵へ此れ一宿明朝帰宅つるまへ又一人と
まへ此品川を外々の宿と遠い遊女多くゆり酒の相手とる遠

遊の若人小態々此れ小来りて遊樂とあせ美目くさ手弱女の多ゆ
あり是も又時の真あり今宵と爰小打解和ふ先生と饗應さんといふ
主水も以前の身よりせむ去るれへ入るまへゆり酒の相手とる身
かり又一つみ人多く入るれあり若や便宜と得る事りやゆり人
思ひくへ何まりの進み後りといふ故夫より其れと立出手引あそ茶
店へ行つてこの放樓へあり共よまへ案内致し呉るとして此れと
橋本屋とつる家の艶色美遊女多くゆり酒の相手とるまへ
御案内申すと橋本屋といふ連行より扱交りて又酒宴と催し門下
共る奥小入酒も長回小及びて席も納り何まの圍中へ入る去る主水
が相方の遊女一向若輩と漸十五六より成ゆりと思ひて手弱

女なり主水心よありあけり斯る若年者詞敵もあらず共却て心置
 ます一とて我元より斯のどく遊所へ入る心なきまじき畢竟
 人々の進めとつひ若くは手かたにならざる支りや有人りと思ひ来
 りて最早彼是亥の刻も過ゆんふとく一眠せんと枕ふは
 眠らんと思ふ表の方の大座敷も先刻より講つ舞つ多執の声で
 浮き居る客ゆを何者あんと思ひ彼相手の手弱女小ゆまの此家の
 客あるやと問ふあまの是橋本屋より全盛あぶ方なき白糸との
 遊女の客もくゆびどき諸侯方の儲君ありとて故諸侯より身
 りんと斯る遊所へ来るも有間敷とて思ひ何まの君あるやとふ
 ゆまのそ下懸なる千葉家の儲君もくあつる先頃雁野と申すの

飾を寄玉のぐ其折是なる白糸と見深其後折々悉びく来玉といふ主水
 聞て大小驚きあを思ひもくぬ夏に國中うての夏ありもゆる此れ
 他領ありある珍夏の出まんも計らま左多くも若この事録倉
 聞てあひ千葉家の瑕瑾世の朝りを引出さん老臣の人々を此夏と知
 らざる去あざり彼は千葉家の嗣君とつて実定自胤君あるや若
 間違ふといゆらばや実否と糾く思へども我も又勘気の身し
 目小くく思へいふせんと思ひが何をもせよ実正と知ざるとい
 施すべし術も多と夫より密に行き腰障子の間より身と擧げて
 うらみ見らる実自胤相違あり付後ひ人々も皆知まる者く
 らま心の内小歎息し顔て我國中へ取り入り眠らんやまど心小

かゝるもく睡らまほ夜明近くなりまほ門弟中と催促して明ぬ先
本此所と立出我家へ飯りと独りぬくと思案をふ此身過有
て追放の支あまは諫言もあまこと能くは又父の方へ申送りても是
連も出仕遠慮の支あまはいふ共可為中うゆくと去通知らば魚は
打捨置ハ大ある災と引出さんと心と困りめらるる此と思案一何
らまほ今一度橋本屋へ行白糸と中ん逢く様子をも尋ね其上
かく免も角も計とんと或日夕暮らる我家と立出品川へ至り先日
手引るせ一茶店へ行此間我相方一向若輩ある者もく真まは彼
家小白糸とらる遊女ゆる由今宵は其白糸が方へ行度態を来り
らるとして此家の陣家とて御出有らる去あがら同一家あく

相方とらる支もたふら支小候へども妾もふ計ら申べと橋本
屋へ伴い能中ふ取繕ひ白糸と逢せらる扱うと程小酒席も納
りく圍中へ入り小主水言やう今宵我依の本へ来り一決して色小
迷り来り小非ど少く尋度支ゆり来りらるとして白糸も
身小同度支といふある支もく候やとら小主水外の支ももは先
我此家へ来り時俗の本へ通ひ玉ひ千葉家の嗣君の支いつの頃
らう伶い馴染へくあく通ひ玉あや色サバ語り聞せ玉とるべとい
ふ白糸聞く彼君の支もつらる此国の守尉ヶ谷殿と俱々に此邊と
将一玉折此家へ立寄玉い舞御目小留り一由あく其後折々通せ
玉へども去御身とて賤く遊女の本へ通せ玉あく御身のゆ



白糸



橋本橋よ
 白糸主人白
 糸とまはせと
 うらぶら

主人

悪くんと態と難面應答ども又其後も来玉ひく此身御心小後ひふ
贖く御傍小召仕とまんとの支る共共る宣小様御心の内のゆき
まへに譬へ後ひ奉り此身と贖ひ玉やとと御家の人々何とと其
置るや此身の捨らま終る御身の仇とあるらん其れ小御心の付る
虚気かると小何建後ひ奉るも賤くも勤の身もまも浮るも乃
富貴の好ましくも譬へ貧しくも世と経る共至誠ゆる人あつて生涯
此身を伴くまじと心小誓ひい支ゆる一度の情もゆらるとつ門
迫り通ひ玉あんと始り終りと物語まへ主水と聞くと小感しうき
川竹の身の上の世小恥し心操し其実美ゆる心小感し此身の上
も明白小打明て語るあり我元千葉家の臣あり過ち有て勘気と

受斯浪々の志のまも古主の嗣君の去る行状と餘れ小見んの本意を
らそ去建勘気の身の上なり諫る支も叶り候と信を頼りて遠く
貫くと態を来りく様子と聞け却て此方小恥る支のま太あり何
本此後俗の元へ通ひ玉ぬや計ら支る成回数やといひ白糸心小思
や実真心ゆる頼みと心底る勘當受る古主へ對し左程忠美を
思ふ者又有難と忠臣し斯る男小連添くして譬へ善くも悪くとも
女子の身もく本望あると主水が誠の慕く宣ふ如道理有り外々の
遊女と支変り元より我身の方より媚と賣り呼奉るふあり存るもへ
あま此後通る玉ぬぬや毒計の申べといふも主水大に悦び此言も永
引玉に報ひる我生涯の力とあるん兄弟も思ひ何支も心置る

商議をせしむるに白糸聞て我身父母も多し同胞連ゆめを便り
あま身の上ありあは宣ふ偽りあはた一年小一度ありと二度ありと
永く毒が元へ通ひ玉りまじむかとなんと計りて心置きて頼母
りべん定めて内君もかりまじむ此身を休小なりとく時々の婢女
ともあはく御側小置と玉りべし御心より深きも此願ひ聞届け玉る
べしと又玉水も今更引不引まじ珠小彼が遊女小似げあり見識あり
志の殊勝ふふ否もゆるそ又此方の夏を頼もく彼り頼もくきこの
ごうも悪しと思ひ俗のふ知実あるが兎も角もまじむ我今浪々
の身もく何夏も心小任ちのべ然しく折々来るも却く俗のふ恥る
夏の有あんとくそ何ぞ宣ふ我身の方より斯ふあま泰らふま

事あまが俗の耻辱ある様の夏をせし其外ホハ心小懸玉あると五小
浮く心ならずぞして赤心と願ひ語り合ひ行末の夏追契り思へん
爰小深き縁糸と結びくる復説自亂を遊士の人々の申小任せ思ひあ
白糸の本へ通ふとくも彼へ小思ゆる難面もは心小後いじりか
い思ひの増え心と苦くゆる遊士の人々此夏と平馬小語りし小
平馬小申す何糸去る夏のゆるる遊女の宝とより誘引小後ゆる
夏やゆる夫より何子細あるべし我行らんまの君の心小後とせ見せ
べしと子故遊士の人々自亂小告くふやう五十嵐平馬小物小熟る
者あり彼と召連らまじ御越ゆる白糸御心小後ひ奉る申す計らるせ
玉とつひまが如何様とくへし平馬小委細の様子と物語へる

去くも合白ゆぐん汝我と俱同道しく彼が心成圓結し具まき
 白と有るま平馬兼光白糸と中んが君の御心小後がらといふまき
 答し其御供し泰りあり善悪とり小御心小後りせ申べしといふ故自
 亂悦い去るぐ今在同道ありとてとてまきりしが障らまの
 マく久敷白糸が本へ来玉いりし久白糸を悦び居りし又々或時
 白胤の来玉いりし白糸急小病おりしと偽り酒席へまも出そ人と
 以く自亂いりせまの中んとあま御身うと賤しと我身の本へ通
 ひ玉小変有難と追嬉しく侍まとも斯る遊外へ御入らせ有て世の
 人口も防ぎがく御身の為悪うと又此後幾夜通らせ玉ふとも子
 細有くつ追も御心小後い奉らまの候まき必とく此後御越

有回敷こと申送りたる自留是と叩當と怒り世の人口身の為悪うと
 と汝小習んや己まら女小誇り人と侮る彼が詞へりて具んと平馬
 代招と如此々たりと宣い平馬兼光其小御任せめりといひて
 案内して白糸が外房へ行我君斯追まらせ玉ふといひまの左程
 迫強面ありの奉らや御心小後い奉りまのいつ追が斯れ小置せ
 らんと身と贖くと館へ召ま嬖妾共崇めらんとま其身の出世と思
 たらや御心小後りまといひの故とといひまの一夜流の身あり
 ゆまびやある者も身と任そが遊女の常あまど貴さ御方故末の
 遂ぞらまと思ひ後の奉らといひ平馬聞て今いまき身と贖ひ玉ん
 小何也末の遂ぞら事すのゆるといへど休てと志り宣いとも賤しと此身を

贖ふく御館へ召く共御家の人々見て中居るへと終る此身も捨
らましく却て君の仇となりあん夫故末の遂なるま申し平馬聞て
夫の其方る箇違なり遊女と贖し建館へ召きある老臣達も見て居
誰なる兵親と頼宮仕へお出ん小誰人か各むとさといひ白糸心小思
中此人も是御内とそと輕うさう身柄と見ゆら小君と諫めらせ
如く情欲と物くうの主水ゆと云泥の相違なり斯る人小同答を
無益ありと思ひそい鬼も何と角もゆといふある高位小備りて栄耀
栄花小世と經る共大切の御身と持たぐる色小潔く去る拙と君り
生涯身と任せ奉らとと今詞も筋とさといひ放せ平馬の聞て確と
怒り欲と知らるる虚気まといふ物る我申とを聞くと其終小止

たさる己まが體を賣物ありとや身と贖く連行は活人共殺ん共
俣たり其詞忘るると思置嚇とと出行より自亂を待兼てへう小
せとと問玉へ平馬り小様実小意地強と女たり一應うといふ美
知致と此上の彼が身と贖く連行玉といふ小意地強く共御心
小後とぬといふ夏をば去るが君是小留在て金子と取るせ玉又
うの老臣共の耳へも入り悪るべし今日應對を置重く贖ひ出
玉と然るべしといふ自亂去るべし汝と小計らふと仰ある故
平馬此象の亭主と呼び委細應對を置其目の自亂と伴ひ三郎り
大川仁左衛門傳卷之一終

